

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2017.9) 平成28年度:77.

壮年期にあるがん患者が治療を継続していく体験

中野 美咲都, 佐々木 真菜

壮年期にあるがん患者が治療を継続していく体験

旭川医科大学病院 看護部 ○中野美咲都 佐々木真菜

【目的】

壮年期にあるがん患者が、再発、転移を経験しながら、治療を継続していく過程でどのような体験をし、病気や治療と向き合ってきたかを明らかにする。

【方法】

対象者は、2年前に大腸がんの手術を受けた壮年期にある男性。転移があり、仕事を継続しながら化学療法、手術を繰り返してきた。質的記述的研究を用い、患者の診療記録、看護記録よりデータを抽出した。「これまで治療と向き合ってきた体験」について非構造化面接法を用いた。

【結果】

全逐語データ72個を分析し、10個のカテゴリーが抽出された。

A氏はがんと診断され衝撃を受け、死を意識したことで人生をより充実させたいと＜人生の意味付け＞を行った。告知から治療継続の過程の中で＜今後の疾患経過への不安と覚悟の錯綜＞する体験をしながら病気の進行や転移など＜疾患経過の受け止め＞をしていった。

その過程で、医療者の言動から＜病状の予測＞をしてしまうため＜医師を信頼＞し情報を一本化し、＜がんの情報が無意識に入る脅威＞と向き合っていた。一方、治療上の体調管理やライフイベントにおける目標を設定し、＜モチベーションを維持＞しながら、目標達成のため＜セルフケア行動の獲得＞をしていった。病気になる前は参加していなかった自身の趣味に家族が参加するなど＜家族の変化＞を感じ、友人や職場の理解があり＜人に恵まれている人生＞と感じていた。

【考察】

A氏は、がんサバイバーとしての不安と覚悟が錯綜する体験をしながら、自身が病気と前向きに向き合えるような対処行動をとっていた。その中で自身の価値観や信念をみつめ、対処能力を向上させていた。したがって看護師は、疾患経過に伴って変化する目標を共有し、モチベーションを維持するための対処行動を支援することや患者の内在する力を把握し引き出す関わりが必要である。